

人に優しく、自分自身も守る

いとう あきひで
伊藤 彰英

●日本基幹産業労働組合連合会 事務局次長

新型コロナウイルス感染症対策に関しては、すべての自粛要請が解除され、それぞれの立場でさまざまな工夫のもと、懸命になって徐々に日常を取り戻そうとしている。この間、われわれの生活を支えるために働いていただいている方々に、感謝がやまない。

コロナ禍で外出が制限されていたこともあり、普段からランニングをしていた人以外にも、体力維持や免疫力の向上、ストレス解消を目的にランニングをする人が増えてきている。著名な教授のご発言の影響から、時には散歩している人から顔を背けられつつも、何はともあれ、マスクやバフを着用し距離をとるというランニングエチケットのスタイルが一般化している。

周りを見渡すと、河川敷では指導者たちがマスクもなしに大声を張り上げて少年たちに指示を出していた。公園では若者たちが密集してボールを追っていた。大人たちが大声を出してスポーツに高じていたが、当然のように何かで顔を覆っているわけではなかった。

一方でランナーはどうか。暑い中でも顔を布で覆い、間隔を空け、細心の注意を払いながら走っているにも関わらず、なんとなく肩身の狭い思いをさせられている。強いて言うなら、他のスポーツとの違いは行動エリアの限定度合いであろうか。ランニングはどこでも手軽に始められるが、自由な分だけ制約が強いのかもかもしれない。

いわゆる自粛警察の方も見かけたが、暑くてマスクを外すランナーを見ては、ビックリするくらい大声で指摘していた。ウイルスも暑さも命に関わることであるのは確かだが、その状況においてどの対策を優先すべきかが問われる。

さて、私は大自然の中を走るという魅力にとりつかれ、近年はトレイルランに勤しんでいる。野山を駆ければどの時期も趣があり、春の花、夏の新緑、秋の紅葉だけでなく、雨が降れば溪

流は迫力を増し、冬になれば人影もなく厳肅な気分になる。

6月吉日、ようやく移動制限も解除されたので、トレラン仲間を連れ立って山梨県の百蔵山・扇山を走ってきた。久しぶりのトレランに、マスク越しにもみんなの満面の笑みが分かる。再会を祝してのハグやハイタッチ、大声で笑い合いたい気持ちを抑え、ランニングエチケットを守りながら黙々と走った。

ただし、標高1,000mを超える山では、マスクやバフをして登っている人はどこにもいない。よほどわれわれの走る姿を不憚に感じたのだろうか、登山者の方々から「マスクを外して思いきり美味しい空気を吸ってくださいね」「こんなに広いんだから気兼ねなく走ってくださいね」と優しく声をかけていただいた。別に特に意識していたわけではなく、つついロードからの流れでエチケットが癖になってしまい、マスクを着けていただけのことであるが、声をかけていただいた人の厚意に甘えると、マスクを外して走る山の空気は最高だった。そして、われわれを気遣って声をかけていただいた方々にも笑みがこぼれ、とても素敵な一日になった。

物事の一部だけを切り取り、自分の正義感だけで人を非難したり、恫喝したりすることが増えたが、それだけ多くの人が未体験の事態にストレスを抱えているということかもしれない。TPOをわきまえ、人に優しく、でも自分自身も守る。それがこの夏の新しい生活スタイルなのかもしれない。

いつもならトレランの後はみんなで温泉に浸かって、ビール片手に反省会といくところだが、その日だけはぐっとこらえて駅のベンチで密やかに乾杯して帰路に就いた。心の中では、山でかけられた優しい言葉を反芻していた。

ご安全に、ご健康に。